

臨床心理学で何がしたいのか

—リサーチ・クエスチョン探訪—

森 田 美弥子

心理学というのはれっきとした学問領域であるのに、あまりそう見られていないと感ずることがある。人は日常生活の中で、それぞれ自分流の心理学理論（的なもの）に基づいて、こういう人はこんな行動をとりやすい、とか、その時その人はこんな気持ちをもっていたに違いない、などと判断しているからだろうか。そんな主観的な素人判断が時として、人生経験に裏打ちされた優れた人間理解となっていることすらある。しかしそれは確実なことではない。

カウンセリングや心理検査は専門的な技術である。検査はそれなりにそう思われている節もあるが、カウンセリングの応答の仕方や介入のタイミングについてもそうなのだという事は意外と知られていない。臨床家はその時その場にふさわしい有効な働きかけを吟味し判断して行っている。臨床を学ぶ大学院生ですら初心の頃においては、ただ単に話したり聴いたりしているだけだと思ひ込んでいる様子が見受けられ、驚かされることがある。彼らが次第に技術を身に着けていく過程を見るのはとても嬉しい。

人が心理学に興味をもつのは、おそらく自分自身を知りたいからだろう。心理学者が研究テーマとして選ぶのは往々にして、自分自身の理想追求であったりコンプレクス解消であったりする。特に臨床心理学の場合その傾向が強いかもかもしれない。しかし、出発点は「自分」であったとしても、それが他人様の役に立つようにするのが研究者の役目であろう。それは実現されているのか？

そこで、私自身のリサーチ・クエスチョンがどのように生まれてきたのか、振り返ってみよう

考えた。自分が何故、心理学に興味を抱き、それを生業とするようになったのか？この問いはおそらく私自身にのみ意味があることで、他の人たちにはさほど興味のもてることではないかもしれないが、この機会に書いてみることにした。

私が臨床心理学にたどり着くまで

小学生の頃、「判決」というテレビ番組があった。法律事務所を舞台にした毎回1話完結のドラマで、登場する弁護士たちがさまざまな事案に取り組むというストーリーだった。行動（そのドラマでは犯罪）には背景がある。それは単純ではない。そういえば最近のテレビ番組にも弁護士集団が主人公のものがあつ、私はそれも面白く感じながら見ているが、最近のはコミカルな要素も多分にあるのに対し、「判決」は社会派ドラマだった。やむにやまれず、あるいは知らず知らずに本来は望まぬ人生をたどることになってしまった人たちが描かれ、おそらく多くの視聴者は世の中の矛盾や社会の不条理に憤りを覚えたことだろう。しかし、私はその「人」に目が向いた。今あるその人は、そこに至る人生を背負っているのだ、ということに思いをめぐらすようになった。

中学生の頃、「楡家の人々」という番組があつた。北杜夫の小説がテレビドラマ化されたものである。精神科病院の院長一家や入院患者たちの人間模様が（こう言つては不謹慎かもしれないが）おもしろおかしく描かれていた。登場人物たちの思いもよらない言動が、私には何とも不思議に感じられた。それはドラマだから誇張や創作があつているとわかつてはいるのだが、それらの言動の背景に一体どういう考えや気持ちの流れが生じて

いるのかと、またもや思いをめぐらすこととなった。

こうして振り返ってみると、私の進路選択はテレビの影響大だとわかり、我ながら少しあきれる。私が生まれたのが、わが国でテレビ放送の始まった年だからだろうか？しかし、私は弁護士にも精神科医にもならなかった。それどころか、大学進学時にはそんなことはすっかり忘れており、ミーハー的な憧れで語学と国際関係論をやるつもりで国際基督教大学（ICU）に入学した。当時のICUは教養学部の中に、私が所属した社会科学科と、人文学科、自然科学科、語学科があり、いずれかに入学した上で3年に進級する時、希望すれば教育学科に進めるというシステムだった。たまたま受講した心理学の授業で、知覚の話の聴きながら、心って面白い！と再び気づかされることとなった私は、3年から教育学科教育心理学専攻に移り、都留春夫先生、星野命先生から臨床心理学、人格心理学などを、古畑和孝先生から社会心理学を、原一雄先生から実験心理学、基礎心理学などを学んだ。

4年生になってから昔の記憶が蘇ってきた。臨床心理学の世界に入っていきたいと考えた頃に「臨床心理学講座」（誠信書房）を読み、その中で紹介されていた、ある大学附属病院の、今で言う臨床心理士養成プログラムのようなものを見つけ、これだ！と思った。その大学に電話をかけ、学内をたらい回しされた後、やっとその病院の精神科でそういう仕事をしているらしき人に出会えることになった。多分それは乾吉佑先生だったと思う。真夏のある日、私は病院を訪ね、1時間ほどだろうか、話を聴いていただいた。先生からは、「無給助手のような生活になってしまうよ。大学院進学も考えているのであれば、そちらを勧める」とアドバイスされた。そして、名古屋大学の大学院を受験し、無事合格することができた。村上英治先生、丸井文男先生、蔭山英順先生から名大の臨床を学んだ。

修士課程の頃——

自己意識のあり方は人の適応に影響するか？

ICUでの私の卒論のテーマは「仮面自己」というもので、詳細設定は今手元に資料がないのだが、確か職場における自分と一人での自分のついて、Self-differentialを用いて自己イメージを測定した。1960年代から70年代にかけて自己意識・自己像の研究が国内外で盛んだった。おそらく私の心の奥には「自分とは何か？」といった青年期的な疑問があったのかもしれない。しかし、頭では、自己意識のもちようが適応に影響する重要な要素であるにちがいない、ではどのように自分をとらえていることが適応的なのだろうか、と考えていた。名大での修論は「適応感についての一研究—自己意識との関連において—」で、やはりS-D法とPurpose-In-Lifeテスト（PIL）を用いて、得点の高低によりできた4群にロールシャッハ法を実施して、本人の意識する自分と意識せずに行動にあらわれた特徴との関連を見た。positive self × high purpose群は健康的だが少々幼いところもある素直な人たちで、他の3群はそれぞれ異なった意味で気になる人たちだった。negative self × low purpose群は防衛的で自己表出を抑えがちな特徴をもっていた。negative self × high purpose群は意欲的だがマイペースで予測しにくい行動に出るような特徴をもち、ロールシャッハ法を実施する個別調査への同意が得られにくく、約束していたのにすっぽかされるということもあった。positive self × low purpose群は不安や緊張が強く現実吟味に若干問題を感じさせる人たちであり、該当者は少なかった。単に自己イメージが肯定的かどうかよりも、PILに反映される生きがい感・充実感が重要だと感じられた。そして、適応に影響する自己意識とは、静的なものではなく、動的な機能なのだと考えた。

病院臨床の中で――

慢性統合失調症を生きるとはどういうことなのか？

修士を出た直後、私は村上英治先生の紹介で刈谷病院に就職した。常勤で6年間、その後7年間を非常勤で働いた経験は、私の臨床の原点である。今の時代では考えられないほど無知な状態で就職したのだが、日々新鮮で楽しかった。当時の精神科病院は長期に入院する慢性統合失調症の患者さんが多かった。誤解を恐れずに言うならば、私には病める人たちのために何かしてあげたいなどというメサイア・コンプレクスは無かった。ただただ、人の心の中、頭の中はどうなっているんだろう？ それを知りたい一心だった気がする。院長の中野啓次郎先生は自由に仕事をさせてくださり、年間100件超のロールシャッハ法をとり、ほぼ同じくらいの他の検査（WAIS、ビネー、TAT、バウムなど）をとり、外来、入院の心理面接ケースも担当していた。何もわからず飛び込んだにもかかわらず、無謀にもせっせと学会や研修会で事例を発表したりもした。

心理の先生って何する人なの？という周囲からは思われているという現実直面してショックも受けた。CPと言えば、Cerebral palsyやChlorpromazineという言葉は知名度があるが、Clinical Psychologistなんて、何それ？という時代である。それでも常勤で地道に何年か勤めていると院内外でのネットワークはつくられていき、他職種ともよく遊びよく学んだ（つもり）。次第に私は、重い疾患を抱えながら生きていくということはどういうことか、そこで自分のできることは何か、と考えるようになっていった。長期に病院に関わる慢性の人たちにとって、この世は大変生きにくいところである。特に統合失調症の患者さんは生きることにも不器用で健気だと感じられた。PSWや看護師さんたちと解放病棟の立ち上げ準備の勉強会をしたり、生活療法に加わって共に活動したりする中で、CPとしての自分の役割を模索した。

そして、私なりに目指そうと考えたのは、「ア

セスメント」の洗練である。当時は何となく考えていただけなのだが、患者さんが感じていること、志向している方向、できることなどの特徴をとらえ、それを患者さん自身に伝え返すと同時に、関係者にも伝えていくのが私の仕事なのではないか。人によっては、もっと積極的に治療改善に取り組んでいくことを仕事としたいと考える人もいると思われる。が、私は疾患を直すことよりも、疾患を抱えて生きることをバックアップすることを使命としようと思った。

再び大学院へ――

6年間の常勤職を辞め、大学院博士課程に入学した私は、非常勤を続けながら統合失調症の人たちにとって生きがいと感じられることは何か、という大それたことに取り組もうと考えていた。PILなども用いた検討を行って発表したりしていたが、十分な成果には行きつかなかった。出産・子育てのために自分自身の生活が中心になったからだと思う。一方で、やはり常勤として病院の中にいないとやり遂げられない課題だったのだという風に今となっては考えている。病院臨床を一生やり続けようという勢いが少々トーンダウンしていた頃に、学生相談の仕事が舞い込んできた。

学生相談臨床の中で――

相談室イメージはその後の来談を予測し得るのか？

人は何故、どのように相談機関を訪れるのか？ 面接中断や終結、再来談の背景には何があるのか？

後期課程を満期退学した後、名古屋大学学生相談室の専任として就職した私は、ちょっとしたカルチャーショックを経験した。学生相談室にはかなりの数の学生が来談するのだが、継続面接を導入しようと思うとやたら中断してしまうのである。これには次のようなことが関係していると感じて、翌年からは中断が激減した。

それまで私が携わっていた病院臨床では、本人

が望むかどうかにかかわらず明らかに支援が必要な人が受診し、患者アイデンティティを持ち(持たされ?)、多くは終わりなき面接が続いていた。こちらはともすると病理の視点をとりがちであった。他方、学生相談室は大学という日常生活の一角にあり、クライアントは先ずもって学生アイデンティティを持っていた。私は半ば当然のように「じゃあまた来週」などつなげようとしたが、それは極めて安易で不十分な対応だった。青年期発達という視点、現実生活と内的課題の関連という視点が必要であることを痛感した。翻って、それは病院臨床でもどこでも必要なことであるのに、表面的な理解しかしていなかった自分を恥じることとなった。心理療法のプロセスについてあらためて来談学生たちから学ばせてもらった気がする。

しかし、まだまだ知られていない職種であり部門であった。紀要を刊行し、新入生アンケートの結果や年間の来談動向の集計などをまとめる仕事をするうちに私は、最初は相談室イメージに、次に来談動機というものに関心が向くようになった。簡単に言うと、相談室に対して肯定的なイメージを持っている学生は比較的早い時期に来談し、短期間で元気になり、ただし中には何度も繰り返し来談する傾向も見られた。一方で否定的なイメージを持つ学生は残念ながら来談が少なく、かつ中断しやすかった。ニュートラルなイメージ(要するに「相談する所」でしょ、というような)を持つ学生は何故か来談率が最も高く、しかしガイダンス終了となることが多かった。本当はもう少し内的作業をした方が成長発達を促進することができるのに、とこちらは感じてても学生自身は継続面接を望まない傾向にあった。そして、一番驚いたのは、イメージはない、わからないとアンケートでは答えていた学生たちが、2年後3年後にやってきて、じっくりと自分に向き合い、納得のいく面接終結を迎え巣立っていったことである。心の仕事とは機が熟した時に始まり、そうすると自然と問題解決の道筋も見えてくるものだというところ、人は自己治癒力を確かにもっているのだとい

うことを認識した。いつもうまくいくとは限らないが、私としては印象に残る面接を幾度となく体験した。

その後、私は相談室イメージからの展開として、学生たちが何を求めて相談場面を訪れるのかを考えるようになった。助言や情報を得たいというガイダンス期待もあれば、内面を語り整理したいというカウンセリング期待もある。どうしたいのか、どうしてほしいのかわからず、とにかく助けてほしいと駆け込んでくるようなケアサポート期待もある。そしてそうした相談期待は来談時期(学年など)や相談内容によって意味が異なり、それらを組み合わせて考えると経過の予測がたつということもわかってきた。上司であった鶴田和美先生が「卒業」というテーマでの研究や、「学生期」という言葉で大学生の発達をとらえる枠組みを提唱していたことに影響を受けていたと思う。

学生相談室で出会った学生たちは総じて、自発的に来談し、内省的によく語り、ひとたび継続面接に入ればかなりの割合で終結に至った。心理療法の起承転結のようなものが少しわかってきて、セラピスト冥利に尽きるというか、心理臨床家としての達成感の得られる現場だったと言える。ところが、そんな私に、またもや転機が訪れた。

教員となって――

人はどのようにして心理臨床家になっていくのか？

臨床家はクライアント情報のどこに着目し、支援に結びつけているのか？

以前、他大学で学生相談室から学部教員へ異動した経歴をもつ先生に、どうして職場が変わったのか尋ねたことがある。「地位と名誉が目くらんだんですよ」と、その先生は冗談めかして答えてくれた。その後その先生と同じ選択を私もやらかしたことになる。後悔はしていないが、大正解だったかどうか疑問である。

3年間の医療技術短期大学部勤務を経て教育学部・教育発達科学研究科に赴任した私は、投映法

とくにロールシャッハ法を中心としたアセスメント関連の授業を主に担当した。また、面接プロセスについて検討する授業や、多様な場での臨床心理士の活動・役割を知る授業なども行ってきた。大学院の授業で扱った「初回面接」や「親面接」といったテーマを共同研究へと展開したことも懐かしい思い出となっている。院生たちとの共同作業それ自体が楽しただけでなく、面接プロセスの検討や質的分析を通して、院生たちにとって臨床実践の面でも何か役にたっているのではないかとも感じた。なおかつ私にとっても、何を教えたらいいのかを考えることのできる貴重な体験となった。

ロールシャッハ法についても、テスト体験の意味の検討や、査定教育についての調査研究などを実施した。養成教育を具体的に計画していかねば、と考えたためである。古くからの仲間たちと名古屋大学式技法のスコアリング・カテゴリーの検討などを行い、マニュアルをよりわかりやすく充実したものにして伝えていこうとしているところである。授業の中で学生から質問を受けると、あ、そこがわからないのか、じゃあ詳しい説明が必要だ、と気づかせてもらえる。自分が院生の頃からロールシャッハ法に魅せられて何十年、最初はあくまでも人間理解の一つの手段であり、病院臨床時代はひたすら実施に明け暮れていた。ロールシャッハ法そのものを研究するようになったのは、教える仕事についてからである。現在は、テスター（臨床家）がロールシャッハ・プロトコルのどこに着目するのか、というテーマで共同研究をしている。経験年数によって着目は広く深くなっていく様子が確かめられた。初心者は、間違った着目はしないが、たとえば、反応内容（Content）の特徴はとらえやすいが、反応決定因（Determinant）の特徴はスルーされやすいなどの傾向が見られた。決定因は各スコアの心理学的意味づけを理解するのに時間がかかり、解釈において十分使いこなせないためであろう。また、たくさんの特徴に同時に目を向けることが難しく、それらを結び付けて生き生きとした人物像を描くの

に苦労していた。

ロールシャッハ法は私が病院に勤務していた時代に比べると最近使われなくなってきたようである。しかし、たとえ使わなくても学んでおくことは意味があると私は考えている。顕在化した行動から内面の「その人」を知るという心理臨床の基本的な視点が身につくからである。実はそれはロールシャッハ法のみならず、他の投映法や、さらにはウェクスラー法などの知能検査、発達検査、質問紙法等々にも通ずるところである。残念ながら、ロールシャッハ法のような手間暇かかるものを研究テーマとしたり研究手段としたりする学生はきわめて少なかった。ただ、院修了後に臨床現場に出てから本気でロールシャッハ法に関心を持ち、熱心に研修会・研究会に参加する人たちが増えており、頼もしく感じられる。以上のように、ごくごくささやかながら、教育と研究と臨床実践が結びつくような養成教育を、私なりに心掛けて努力してきたつもりである。

森田ゼミのResearch・クエスチョン——

最後に、私がこれまでに指導教員として担当した修論生の研究テーマについて少し触れてみたい。私は平成9年10月に名古屋大学教育学部に赴任してから、本年度までに49名の修論生を担当した。卒論生はそれより多くテーマも多様だが、学生個人個人の興味関心の影響が大きく、研究成果を世に出したいという動機づけがそれほど強くないので、そこまでとりあげると若干拡散しそうである。また、博論生はそれより少なく、研究テーマは明確であり臨床実践などに役立つ成果発信も確実になされている。修論は、卒論よりも研究らしい研究であり、ただし博論ほどではない、主観的な関心が客観的な研究成果へと移行する途中にあることから、Research・クエスチョンを展望するには一番適当だと判断した。卒論も博論もそれぞれその半数ほどが修論と重複していたこともある。

本当はここから本題に入る予定だったのだが、自分のことを書きすぎて余裕がなくなってしまっ

た。詳細は語らない、ということでホッと胸をなでおろす、かつてのゼミ生は多いかもしれない。以下に概要を記していく。修論テーマは本論考の末尾に修了年次順に番号をふって掲載し、本文では〔番号〕のみを示す。

思春期・青年期のメンタルヘルスについてとらえたい

「大学生のストレス対処」(1)、「精神的自立」(4)、「対人的傷つきやすさ」(6)、「職業不決断」(9)、「非主張的特性」(17)、「自己の感情への気づき」(21)、「自己愛傾向」(27)、「摂食障害傾向」(35)、「居場所感」(36)、と多様ではあるが、青年期特有の自分との付き合い方に焦点を当てるものが比較的初期に多かった。

メンタルヘルスの維持向上に有効な方法や不調への対応方法を検討したい

青年期に限ってはいないが、精神的健康に影響を与えるものとして、「ユーモア」(10)、「共感性と対人恐怖心性」(15)、「自己受容とアサーション」(20)があり、「喪失体験」(25) (39)、「犯罪被害」(28)、「宗教信仰」(48)、「認知症高齢者」(40)といった固有の体験に対する意識などを扱うものも最近見られるようになってきた。

家族関係のメンタルヘルスをとらえたい

母親への注目が多い。「母親の育児不安と夫からのサポート」(2)、「母親の子育て支援ニーズ」(26)、「母親の子離れと家族イメージ」(30)、「障害児をもつ母親の就学不安と支援グループ」(33)のように母親自身の意識をとらえるものと、「養育者の認知的評価スタイルの内在化」(24)、「母子関係と自尊感情」(34)、「家族イメージと家族機能」(38)のように子ども(青年)から見た親や家族をとらえるものがあつた。また、家族に影響を与える「伴侶動物の影響」(31)という視点もあつた。

学校適応とその支援を考えたい

主としてスクールカウンセラーの活動の工夫や教師との連携をテーマとするものとして、「学校相談活動におけるバウムテストの活用」(5)、「中学校の相談室における自由来室活動」(12)、「スクールカウンセラーと教師の連携・協働」(7) (29)があつた。また、「中学生の友人へのアサーション行動」(8)、「帰国生への態度」(14)、「女子中学生の同性友人グループ」(16)のように友人関係に注目したものもあつた。ほぼすべてが中学生を対象としている。

支援者を支援する方策を模索したい

対人援助職として、心理臨床家を対象とした「イニシャル・ケース経験の影響」(18)の他、看護師の「ストレス関連成長」(13)、「レジリエンス」(27)、犯罪被害者支援員の「感情体験」(22)、大学教員の「職場ストレス」(3)があつた。

相談行動や相談に対する意識をとらえたい

「メールカウンセリング利用への意識」(19)、「悩み相談の発達的变化」(32)、「心理専門機関の利用を勧める意識」(41)、「カウンセラーに対する印象」(43)、「医療場面での専門家の言葉の影響」(44)、「相談を抑制する要因」(45)、「メンタルヘルス領域へのイメージ形成」(46)、「援助要請プロセス」(49)と、最近増えているテーマと考えられる。

アセスメント・ツールを洗練させたい

「レゴ・ブロック」(11)、「風景構成法」(23)、「コラージュ」(42)、「TAT」(47)があり、新たな技法の開発、実施体験の検討、解釈仮説の吟味などが目的とされていた。その他に、バウムテストや動的家族画を方法として用いたものがあつた。

16年間を振り返ってみると、臨床実践に役立つ何らかの知見を得たいという院生たちの熱意が伝わってくる。一つの論文に複数のテーマが盛り

込まれているものもあり、分類は恣意的だったかもしれないが、大別すると、心の健康とは何なのか、それを支援するために何をするか、この2つの方向性がある。願わくば、それぞれの原点にあったリサーチ・クエスチョンを思い出しつつ、さらなる前進をしていってほしい。私自身もまた、ロールシャッハ法、アセスメント、相談行動、支援者支援をキーワードとして、今後も仕事をしていきたい。

森田ゼミ修論生の研究テーマ――

- [1] 学年差から見た大学生のストレスにおける認知的評価と対処―発達課題としてのストレス― (西田, 2002)
- [2] 母親の育児不安・養育態度と夫からのサポート―夫婦間や必要度との不一致の視点から― (武内, 2002)
- [3] 大学教員の職場ストレスの解析と精神的健康への影響―大学固有の職場環境・対人関係の視点から― (久利, 2003)
- [4] 大学生における精神的自立に関する研究―他者に対する必要性・期待・満足度との関連から― (得能, 2003)
- [5] 学校相談活動におけるバウムテストの活用についての―考察 (竹内, 2003)
- [6] 大学生における対人的傷つきやすさに関する研究―対人的成功・失敗場面での原因帰属との関連から― (平松, 2003)
- [7] スクールカウンセラーと教師の連携に関する研究―コーディネーションの阻害・促進という観点から― (上杉, 2004)
- [8] 中学生の友人に対するアサーション行動―行動後の気持ちとアサーション意識に着目して― (大賀, 2004)
- [9] 就職活動の心理学的意義に関する研究―職業不決断が及ぼす影響の観点から― (市川, 2005)
- [10] ユーモアを感知することがメンタルヘルスに及ぼす影響―ユーモアの質的側面からの検討― (伊藤, 2005)
- [11] ブロックを用いた心理療法のための基礎的研究―POMSによる気分変容の検討― (加藤, 2005)
- [12] 中学校の相談室における援助活動―生徒のスクールモラルと自由来室活動からの検討― (波多野, 2005)
- [13] 終末期医療に携わる看護師の看取りからの学び―ストレス関連成長と死生観の視点から― (大西, 2006)
- [14] 帰国生に対するステレオタイプが受け入れ側の生徒の態度に及ぼす影響 (川口, 2006)
- [15] 間接的な要求表現の理解に影響する聞き手側の個人特性の検討―多次元共感性と対人恐怖心性に注目して― (永井, 2006)
- [16] 女子中学生の同性友人グループに関する研究―グループにおけるつきあい方と孤独感に注目して― (服部, 2006)
- [17] 青年期における非主張的タイプの特性について―怒りの捉え方の観点から― (松井, 2006)
- [18] 心理臨床家にとってのイニシャル・ケースの経験とその影響について (岩井, 2007)
- [19] 大学生のメールカウンセリング利用に対する意識に関する研究 (鈴木, 2007)
- [20] 自己受容とアサーションの関連について―情動喚起の要因に注目して― (増井, 2007)
- [21] 思春期における自己の感情への気づきに関する研究―精神的健康との関連― (加藤, 2008)
- [22] 犯罪被害者直接支援員の感情体験に関する質的研究―被害者および事件内容へのかかわりに焦点を当てて― (後藤, 2008)
- [23] 風景構成法の描画プロセス―描き手の主観的体験を中心とした検討― (原口, 2008)
- [24] 感情喚起の個人差形成に関する研究―養育者の認知的評価スタイルの内在化に着目して― (山内, 2008)
- [25] 死別体験がもたらす人間的成長―半構造化面接法における「語り」の分析― (由良, 2008)

- [26] 母親の公的サービスへの子育て支援ニーズに関する研究—支援ニーズと育児ストレス・評価懸念との関連— (河野, 2009)
- [27] 青年の自己愛傾向による対処方略および防衛の違いに関する研究—ロールシャッハ・テストを用いた防衛の検討— (白石, 2009)
- [28] 性犯罪被害者に関する認識と態度の調査研究—大学生を対象にして— (立川, 2009)
- [29] 特別支援教育における教師と保護者の協働に関する研究—教師の協働に対する態度と自己効力感— (細溝, 2009)
- [30] 母親にとっての子どもの巣立ちと家族イメージの研究—動的家族描画法 (K-F-D) を用いた検討— (菅野, 2010)
- [31] 伴侶動物が人の家族機能と主観的幸福感に与える影響 (三澤, 2010)
- [32] 思春期・青年期における悩みの相談の発達的变化に関する研究 (岡野, 2011)
- [33] 軽度発達障害児を持つ母親への就学前支援—就学への母親の不安と子どもの特徴理解に着目したグループ実践 (古木, 2011)
- [34] 青年期の母子関係と自尊感情—母親認知・養育態度を指標として— (西岡, 2012)
- [35] 現代青年の病理としての摂食障害傾向—自己イメージとの関連からの検討— (山本, 2012)
- [36] 大学生の居場所感に関する研究—自己の捉え方の違いに着目して— (飯田, 2013)
- [37] 精神科看護師のレジリエンスに関する研究—面接調査を通して— (藤津, 2013)
- [38] 青年期の家族イメージと家族機能—動的家族画 (KFD) を用いて— (浅井, 2014)
- [39] 母親を亡くした子どもが迎える喪失体験過程の質的検討—青年の懐古的な語りから— (霜山, 2014)
- [40] 認知症高齢者における「ケア」の意味に関する研究—インタビュー調査を通して— (米津, 2014)
- [41] 心理専門機関の利用を勧める意識に関連する要因の探索的検討 (伊奈, 2015)
- [42] コラージュ制作の体験過程に関する研究—言語化された自己への気づきに焦点をあてて— (今村, 2016)
- [43] カウンセラーに対する印象形成に影響を与える要因の検討—カウンセラーの化粧に着目して— (清水, 2016)
- [44] 医療場面における専門家の言葉の影響—不調をストレスに原因帰属される場面に着目して— (山田, 2016)
- [45] 大学生が相談を抑制する要因の検討—相談したくてもしない場合に着目して— (小川, 2017)
- [46] メンタルヘルス領域に対するイメージ形成の要因と自己開示性への影響 (早川, 2017)
- [47] TAT物語に投影される時間的展望に関する研究—量的・質的分析から— (宮城, 2017)
- [48] 宗教信仰の家族内敬称プロセスにおける心理的変容—クリスチャンホーム出身者の語りに着目して— (小林, 2018)
- [49] 中学生のスクールカウンセラーに対する援助要請態度が援助要請行動プロセスに与える影響 (近藤, 2018)